

メイドさんと  
ご主人様の  
140文字日記



作 ARM1475



## 登場人物

---

### ・ご主人様

..... 28歳。いわゆるイケメン。職業は教師。私立皇南学院の中等部と高等部で美術の教師を務める。

良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（A子）を送りつけられる。

好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かA子相手にツッコミが激しい。

A子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「**この女は敵**」と認識している様子。

でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。

ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。

ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするA子に困惑する事もしばしば。

### ・A子

.....本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。

黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば24歳。

才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。

家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。

体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「**この男は敵**」と認識している様子。

しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。

コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。

その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。

またムツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。

メイドさんと  
ご主人様の  
140文字日記

## 第5 2話

---

A子は独り、ご主人様のマンションの目と鼻の先にあるレインボブリッジの歩道上から東京湾を臨んでいた。

涼しい潮風を受け、物思いに耽るA子は、まるで何かをもてあましているかのようにため息を吐いて仰ぎ呟いた。

「...アミメニシキヘビをアニメニシキヘビって言い間違えない人っているのかなあ」

「ご主人様、何故柿の種にピーナツが入ってるんでしょうかね」

ご主人様はA子の急な質問に面食らう。

「ん？ああ、帝国ホテルのバーで、柿の種にピーナツ混ぜて出したのが起源だって聞いた事があるな」

「別にピーナツでなくてもいいのでは」

「例えば？」

「チョコとか」

「柿チョコは既にあるなあ」

「さきいかは？」

「それもありそうだが、湿気っちゃんいそうだな」

「アーモンドやカシューナッツとか」

「アーモンドもナッツは高いからなあ。ピーナッツは安いからあんなに沢山入れられるんだろ」

「ピーナッツより安いモノ……」

A子はしばし唸り、

「……じゃあ海苔とか」

「それなんて品川巻？」

「アーモンドというと...」

ふと、A子はある事を思い出す。

「アーモンドチョコを土に埋めてアーモンドチョコの木を生やそうとした、なんてバカな子みたいな事した人って本当にいるんでしょうか」

「...」

「何故黙るかご主人様」

「そ、それは、だ、誰もが通る道じゃないのか！」

「全然」

A子は鼻で笑った。

「子供はバカだから、直ぐ即物的な行動に走っても仕方ないんだよ」

「流石にアーモンドは無いわー」

ケラケラ笑うA子。

ご主人様はそんなA子を苦々しく睨み付ける。

「他にもあるだろ、ピーナッツを柿の種と思い込んで土に埋めるとか」

するとA子はぎくっ、として笑いをやめる。

「そっちかいいっ！」

「ご主人様、みちびきが無事打ち上げられたそうですね」

「ナニソレ？」

するとA子は机を叩いてご主人様を睨み付ける。

「準天頂衛星初号機を知らないたあどんな了見じゃい！」

「A子キャラ違う」

「そんな事はどーでも良いです。これからの日本のGPS利用を支えてくれるみちびきさんにあやまれ！」

A子に怒鳴られたご主人様は、PCで検索してみちびきの詳細を何とか把握した。

「あー、米国のGPSを補完してくれるのか。確かにコレは感謝しなきゃ」

「今やカーナビだけじゃなく、歩行者の道案内にも欠かせませんからねGPSは」

「ところでこの“みちびきさん”ってゆるキャラ……」

「言うな」

「何か、ゆるキャラ扱いなら何でもアリだな、今や」

「ご主人様、ゆるキャラというと色々ありますが、私の知る限りこれ以上のモノは観た事ありません」

そう言ってA子はPCのブラウザを立ち上げ、日本関税協会のサイトを開き、そこからあるページをモニタに映した。

「...『ゼーニャ』」

思わず固まるご主人様。

参考リンク <http://www.kanzei.or.jp/tsukanshi/moshi/zeignya.htm>

「...何かマスコット用意する必要性に疑問抱いたぞ俺」

「でも注目を集めると言う意味ではコレはコレで正解かと」

「まあ...なあ...」

「他にもこう言うのが」

今度は戸塚区役所の公式サイトのあるページを開いた。

「...『う』.....『ウナシー』？」

思わず言葉を詰まらせるご主人様。

「着ぐるみがまた怖くて」

参考リンク <http://www.city.yokohama.jp/me/totsuka/kusei70/unashii/>

「...何この超獣。目の前に現れたら子供は確実に泣くレベル」

「言っちゃ何ですが、税金使ってやる話じゃないですよね」

「でも、まあ...マスコットキャラは注目を集める事が仕事だから、これはこれでアリなのかも」

「たまには濃ゆいキャラも見てみたいですよね、『せんと君』みたいな」

「アレもアレでなあ...」

## 第62話

---

「『せんと君』はいわゆる“キモ可愛”を、世間に改めて意識させ認知させたと言う意味では、いい仕事をしたと思います」

「確かに結局、世間は受け入れられちゃったしなあアレ」

「私、思うんですが」

A子は真面目な顔で言う。

「チ○コもそのうちマスコットになるんじゃないかと」

「秘宝館行け秘宝館へ」

「え」

「...ご主人様、今の」

「あ、ああ」

西日が差す中、二人はもう一度部屋の外へ耳を澄ました。

「蝉、ですね」

「まだ鳴くのか」

「私が最後に聞いたのはもう一週間も前です」

「今頃になってうっかり出てきちゃったのかな」

その消え入るような鳴き声はしばし二人の耳を障るも、日が沈む前に止んだ。



「ご主人様、実は今日、私、ある事に気づきました」

「いつもの事だがいきなりだなあ。一体何を？」

するとA子は、“ちくわぶ”と“ちくわ”が載せられた皿をテーブルの上に置いた。

「ちくわって、ちくわぶを焼いたものじゃないんですね」

その一言に時が凍り付く。

「……え」

ご主人様は瞬いた。

「そうなの？」

これには流石にA子も啞然となる。

「あ...あれ、まさかご主人様も知らなかったんですか？」

「あ、ああ」

気まずそうに答えるご主人様。

「...豆腐と厚揚げみたいなものだと思ってた」

「私もです。ちなみに“ナルト”も、ちくわぶの仲間だと思ってました」

「いや、流石にソレはない」

「えー？」

「ご主人様、今年のB1グランプリは『甲府烏もつ煮』に決まりましたね」

「マスコミなどの事前の取り上げ方が凄くて一寸フェアじゃない気もしたなあ」

「でも最終的には味が勝負ですし」

「まあそうだな。しかし富士宮、横手、と優勢だった焼きそば勢がついに落ちたか」

「モツ系はこれで2つ目。次は何でしょうか」

「次かあ。やはりしばらくモツ系が続くんじゃないかな」

「私は魚、特に練り物系が来るんじゃないかと」

「練り物というとかまぼこか」

「この公式ページをご覧ください」 A子は液晶モニタを指した。

「来年は兵庫県で大会が催されます。丁度そこにはあのおでんの種のカネテツデリカフーズの本社があります」

「んー？」

「カネテツが何か仕掛けて来そうか、って？ 流石にソレは無いのでは」

「まあ、私も深読み過ぎとは思ってますけど。

ただ、兵庫のB級グルメは『姫路おでん』なので、来年は変わり種のおでんで勝負してくるのもありかと」

「例えば？」

「『上島竜兵盛りおでん』とか」

「いやそれ料理ですら無いから！」

「ご主人様、今年のB-1グランプリですが」

「またかい」

「いえ、2位の『ひるぜん焼きそば』の扱いです」

「？」

「マスコミが面白いくらいスルーしてるのは何故でしょう？」

「言われて見ればどこも取り上げてないな」

するとA子はキリッとした顔で睨み、

「2位じゃ駄目なんですか、2位じゃ？！」

「マテ」

逢瀬編。

---





深夜、ご主人様はベッドの上で突然目が覚めた。

だが身体は動かない。頭だけ自由が許されていた。

彼は所謂、金縛り状態に陥っていた。

しかし自身の異常事態に関心など無く、布団の上にいる存在を注視していた。

「...何年ぶりかね？」

その問いに、うっすらと光る全裸の女性が少し意地悪そうに微笑んだ。

その奇妙な女性は、ご主人様の布団の上に腰を下ろしているが、

尻に敷く布団はその質量に応じていなかった。

よく見ると全裸の女性は布団の表面に綺麗な尻のラインを染みこませている。

明らかに人ではない。

「てっきり死んだかと思っていたが」

ご主人様はその異常事態に全く動じず、笑ってさえ見せた。

「...あれから探したよ」

ご主人様はそう言った。

奇妙な女性は依然無言だが、その笑みが少し曇った。

「あの日、どうして俺の前から消えたのか、教えたくないならそれでもいい。

そんな事はもう良いんだ、また俺の傍に居てくれないか？」

彼らしくない継るようなその声だった。

しかし奇妙な女性は頭を横に振ってみせた。

「...駄目、なのか」

残念そうに呟くご主人様の顔には、返ってくる答えを予め知っていたような冷静さがあった。

奇妙な女性はしばらくご主人様の顔をじっと見つめると、やがてゆっくりと腰を上げる。

その美しい肢体は闇の中へ染み入るように消えていった。

同時にご主人様は再び深い眠りへと落ちた。

翌朝、ご主人様は目覚めると、昨夜の奇妙な邂逅を朧気に思い出していた。

「...夢、かねえ。諦めきれないというか女々しいというか」

大きな伸びをして起き上がり、自室から出た彼はそこでばったりと、朝の準備をしていたA子と鉢合わせになった。

「お早うございます、ご主人様」

「ん、あ、ああ、お早う」

「...」

A子のご主人様の顔を睨んでいた。

「何だよ？」

「...いえ、何か少しお疲れの様子で？」

「あ、ああ」

ご主人様は一瞬、A子に心を見透かされたような気がした。

するとA子は呆れた顔で溜息を吐き、

「いくら若いからってやり過ぎは...」

「イヤお前なんかモノスゲェ下品なツッコミしてるだろオイ」

「違うわ。一寸夢見が悪かっただけだ」

「はいはい、そうですか」

A子は意地悪そうに笑って見せた。

「...? ご主人様どうしたんです、らしくない」

「...あ、いや」

「では朝食の準備しますので」

A子はそう言って離れた。

ご主人様はその意地悪そうな笑顔が、どこか懐かしいそれに似ていたような気がした。  
。

メイドさんと  
ご主人様の  
140文字日記

(第2巻「上野動物園編その1」より続き)

「さて、どっち行く」

「右」

A子は指す方向に、ご主人様は見覚えがあった。

その先には上野動物園内で恐らく一番多く、TVや新聞などで知られている光景があった。

「確か、パンダ舎だな」

「まず定番ですよね」

「まあ。でも今、パンダいないんだよな」

2008年4月に、飼っていたジャイアントパンダのリンリンが死亡して以来、上野動物園にはジャイアントパンダは一頭もいなくなっている。

「今、何がいるんでしょうかね」

「俺も知らん。ま、行ってみりゃ判る事だが」



二人は話しながら旧ジャイアントパンダ舎の前に立った。かつては親子連れが行列をなした場所ではあったが、今やその面影もなかった。

「でも、観客がいるって事は何かいるんだろうな」

「ご主人様、煙が」

旧ジャイアントパンダ舎の中から白い煙のようなものが見えた。

「煙じゃなくて、霧っぽいな。……ああ、ドライミストか」

「あ、秋葉原にもあるアレですね」

ドライミストとは、水を霧状に噴射し、蒸発による気化熱で局所的な冷却を行う冷房装置の事である。水の粒子が小さい為に直ぐ蒸発するので、肌や服が濡れる事はなく、費用もクーラーより安く押さえられる為に各地の街頭で採用が続いている。

「ここは屋根も付いているから、今年の夏はさぞ涼しかっただろうな」

「ご主人様、あれを。何かいます」

A子は檻の中の藪に何かを見つけた。

「あれは……」

茂みの奥に動くオレンジ色の物体を、A子は知っていた。

「腹黒野郎のパチモノ！」

「いやいやいや、レッサーパンダだろ」



ご主人様は檻の看板を指した。

レッサーパンダ。中国南部からヒマラヤにかけて棲息する哺乳類の一種で、パンダとは名が付くがジャイアントパンダの仲間ではなく、正確にはイタチやアライグマの仲間である。

「このパチモノ野郎、ジャイアントパンダの兄貴がいなくなったのを良い事に、パンダ舎乗っ取ったのか」

「いやいやいや」

「ご主人様、パチモノ野郎は可愛いふりしてるだけです。こいつら揃いも揃って腹黒ですし」

「いやいやいや、確かにお腹の毛は黒いけど！」

ご主人様は苦笑いする。その一方で、今の主の小さな身体には不釣り合いなくらいな檻の広さに、少し寂しさを覚えていた。

そんな時だった。

「あ、ビックリした」

「どうしたA子？」

「これがいきなり」

そう言って差し出したのは、さきほど動物園から借りた携帯端末、ユビキタス・

コミュニケーターであった。

よく見ると、液晶画面にパンダが映し出されているではないか。

「何も押していないのにパンダの歴史みたいな説明が始まりました」

「ほう」

ご主人様は辺りを見回すと、レッサーパンダ舎の檻の柱を注視した。



「ほら、あの柱に白い箱があるだろ」

「何ですかあれ？」

「あそこから信号が出て、コミュニケーターが自動的に起動したんだ。動物園の中にはああいう箱がいくつかあって、コミュニケーターが説明を開始する仕組みになってるんだ」

「へえ。これは便利」

「あと、その近くに丸い板が見えるだろ」

「はい」

「それはさっき話したセンサーだ。あれに、腕に巻いているタグリーダーを近づ

けると、レッサーパンダの説明が始まるはずだ」

「そうなんですか」

言われて、A子は件の丸い板に右腕にはめたタグリーダーを近づけた。

すると今度は、コミュニケーターはレッサーパンダの解説を始めた。

「これは便利ですけど、さっきみたいにいきなり始められるとビックリしますね」

「まあ確かにな」

ご主人様は苦笑した。

\* \* \* \* \*

旧レッサーパンダ舎を後にした二人はその先で、動物園の設備とは思えない金ピカ屋根の豪勢な建物に気づいた。

「何このエスニック」

「んー、どれどれ」

ご主人様はその建物の手前にある説明書きの看板を読んだ。



「ふむ。サーラータイと言うのか。タイ政府からの寄贈物らしい、日タイ修好120周年記念で」

「ここにあるのは後ろのゾウに関係あるんでしょうね」

言われて、ご主人様は振り返る。そこにはゾウ舎があった。

「ああ、なるほど。アジア象繋がりか」

「象は戦前から動物園の人気者でしたから」

「うん……？」

ふと、ご主人様はそのゾウ舎の向かい側に、千羽鶴が沢山飾られている場所を見つける。

すると一気に、ご主人様はある事を思い出した。

「A子、ほら、あれ」

言われてA子のご主人様が指す方を見る。

「あれって、もしかして……」

「慰霊碑だな」

動物慰霊碑。それは上野動物園で死んだ動物たちを弔う為に作られた慰霊碑である。

「ゾウ舎の近くにあるのも感慨深いなあ」

「『かわいそうなぞう』を思い出しますね」

「ああ」

それは多くを説明をする必要がないくらいに有名な、第二次世界大戦中、空襲で檻が破壊された際の猛獣逃亡を恐れて殺された実話を元にした、ゾウたちの童話

の事である。

「ご主人様。お祈りしてきます」

「俺も」

二人は懐かしさから来る物憂げな面持ちで慰霊碑の前にやってきた。そして両手を合わせ、死んだ動物たちの冥福を祈った。

「フクロウ？」

A子が慰霊碑の上にフクロウの像がある事に気づいた。

「ここで、フクロウで有名なのって居ましたっけ」

「いや、そうじゃないと思う。フクロウって霊を見守る力があるって言うから、それで飾られてるんじゃないか」

「なるほど。フクロウさん、眠っているみんなの魂をお守り下さい」

もう一度、A子はフクロウの像に向いてお祈りした。

ご主人様はそんなA子を見て、意外とマメなんだなあ、と感心した。

「身長もマメだけど」

「何か言いました？」

「いや、別に」

「お祈りは済ませました。次はどうします、このままゾウに？」

「あっち行ってみよう」

ご主人様はゾウ舎とは反対側のほうを指す。その先にはうっそうと茂る樹木にいくつかの檻が見える。

その手前に、透明な箱と生け簀のようなものがあった。

「何だろうな」

「行ってみましょう」

二人はその生け簀に近づいた。

「あれ、空っぽ」

「んー、どうやらカワウソが居たらしいなここ」

その生け簀は水が抜かれ、動物の姿はない。先ほど見かけた透明の箱はアクリル製の水槽で、生け簀とパイプで繋がっていた。

「カワウソは今入院中らしい。居た時はここに水が張られて、水槽と生け簀の中を泳ぎ回っていたようだな」

「見たかったなあ」

「しょうがないさ。次はあの檻に行ってみるか」

カワウソの生け簀の先に、猛禽類が飼われている檻があった。

「あ、ヘドウィグ」

A子が指したのは、入場門側寄りの檻であった。



「白フクロウが居るのか」

ヘドウィグとはハリーポッターに出てくる白フクロウの名前である。

「上野動物園って、猿山とパンダしか印象に無くて。結構色んな動物いるんですね」

「うーん。子供の頃はパンダや象、ライオンばかり気をとられていたからなあ」

「子供は鳥にあまり関心持たないですしね」

「そうでもないぞ。俺はコンドルが好きだった」

「意外ですね」

「コンドルとかハゲワシとか、羽を広げるとでかくてな、あれが格好良く見えた」

「でもあの鳴き声が……」

A子がそう言った時、奥の檻のほうから怪鳥音のようなけたたましい鳴き声が聞こえてきた。

「……あれがうるさくて嫌」

「わからんでもないな」

耳をふさいでいるA子を見てご主人様は苦笑した。

猛禽類の檻を後にした二人は、その先にライオンの檻を見つけた。

「ガラス越しに見えるんですね」

「あれ、そう言えば俺、子供の頃ここでライオン見た覚えがない」

「ん？」

A子は傾げた。

「居ませんでしたっけ？」

「変だなあ……トラは覚えて居るんだが」

「調べてみましょう」

A子はポケットからスマートフォンを取り出し、さくさくと検索を始める。

「判りました。91年にここにいたライオンが多摩動物園に移動されて、2002年まで不在だったようです」

「ほう。動物園だから大抵の動物はいると思ってた」

「そうでもないですよ。現在上野動物園には、チンパンジーもいないそうです」

「あれ？　じゃあ猿山は？」

「あそこにいるのはニホンザルですよ」

「あ、そうか」

「他にもダチョウが居ないとか」

「ダチョウもかい」

「ワシントン条約で野生動物の移動に制限が掛けられていますからね。動物園は絶滅のおそれがある動物たちの保護や繁殖の研究を行う場でもありますが、見世物小屋ではありませんから、死んでも、何でもかんでも連れてきて飼う訳にはいきません」

「確かに、な」

「ここにいるライオンも、よこはま動物園から借りてきたモノだそうですし、先

のジャイアントパンダも寄贈ではなく実際は中国から借りてきていたものでしたから」

「動物園も意外と世知辛いんだなあ……」

「ま、子供には興味無い話ですが。見られれば良いんです」

「そりゃそうだが……」

「それは兎も角」

A子はライオンの檻を指した。檻というより透明な硬質の亚克力板で覆われたその中は、岩や盛り土、小さな池などが設けられて、自然環境を再現していた。

「さっきの腹黒の時もそうでしたが、柵で覆われた檻、ではないんですね」

「極力、自然環境を再現して動物たちのストレスを低減させてるんだろうな。確か、多摩動物公園でそんな試みをしていたって話聞いた事がある」

「私、多摩動物公園には行った事はありません」

「俺は前に、課外授業で行った事がある。こことは比べものにならない広さで、引率に手一杯で回りきれなかったよ」

「そうなんですか。一度行ってみたいです」

「次の機会にな」

「はい」

A子は元気よく返事した。

「それにしても……」

ご主人様はライオン舎を見る。



「ライオンってどうしてこう、べたあ、といつも気が抜けてんだろ」

檻の中にいるライオンたちは、岩や盛り土の上でごろんと寝そべっていた。確かにだらけているように見える。

「狩りもメスライオンが行いますからねえ」

「これで百獣の王と言われてるんだからなあ。もう少し覇気ってモノを見せてくれないとその名に釣り合わんな」

「怒ると金色に発光するんですね」

「どこのスーパーサイヤ人か牙獣種だそれは」

「私、ライオンの全力疾走見た事ありません」

「俺もない。もっとも檻の中じゃ無理だが」

「一応、人を襲った人食いライオンの話も過去にいくつかありましたし、決して足が遅いとかやる気がない訳じゃないんでしょうけど」

A子の言う通り、実際ライオンは決して足が遅い訳ではない。オスライオンでも飢えている時は狩りで全力で疾走し獲物を捕らえている。その勢いや、動物界一の瞬発力を持つチーターに決して後れをとらない。眠れる獅子とはよく言ったモノである。

「次行くか。右、な」

「ほーい」

ライオン舎の右手に少しなだらかな坂になった穴があった。

「ここはトラだな」

「あれ？ 見えない？」

傾げるA子。ライオン舎と同じく硬質の亚克力張りのそこは、手前にプールのような池があり、奥に生い茂った木々が並んでいた。その先には、向かい側の通路用の観覧用大窓が見える。しかし見渡してみてもどこにもトラは居ない。

「多分、向こう側に居るな。反対側の大窓に行ってみる良い、その坂を登った左だ」

「イエッサー」

A子は坂をどたどたと駆けて行った。ご主人様もゆっくりと付いていく。

坂を登った先には、丸太で組まれた小屋のようなモノがあり、その中に先ほどの観覧用大窓があった。

「あ、居ましたー」



大窓に集まっている他の観客たちに混じっていたA子のご主人様を呼んだ。

ご主人様もやってくると、トラは確かにその大窓の下にいた。大窓の右手にくぼんだ場所があり、トラはそこでうろうろと動き回っていた。

「これではあちらからは見えませんね」

「あっちはプールがあって、水浴びしたい時くらいしか行かないんだろうな」

「ここにいるのはスマトラトラなんですね。なんか言いづらい名前。他の種類は居ないのでしょうか」

「トラは絶滅危惧されている動物の一つだからなあ。ほら、後ろ」

言われてA子は振り返る。そこには写真付きで、トラにまつわる説明がかかれた展示物があった。

「……森林開発が原因で減ってるんですね」

「あと、トラの毛皮目当ての密猟でも減ってる。森林を統べる猛獣も、人間の欲望には叶わないとはな」

ご主人様は皮肉混じりに言う。無論呆れているのはトラの弱さに、ではない。

「だから必死に保護しようとしているわけだが、特にこのスマトラトラはもう500頭くらいしかいないらしい。森林火災もたびたび起きてて、安心して暮らせる住み処も無いんだろなあ」

「阪神タイガースファンが全員支援すれば何とかなるんじゃないんですか」

「いやいやいやあの人たちは別のトラのファンだし。まあトラ繋がり支援している人も少なくないと思うけどな、ノリ良いし」

「.....絶滅しないと良いですね」

A子はアクリル越しに見える、まだうろうろ歩いているスマトラトラを物憂げに見つめながら言った。

「ああ」

ご主人様もうなずいた。

\* \* \* \* \*

二人はトラ舎を後にする。先ほど入った入り口から出ると直ぐそこに見える通路の中から、先ほどレッサーパンダ舎で目撃したドライミストの煙がもうもうと立ちこめていた。

「ここは……あ、反応あった」

A子は再び自動起動したコミュニケーターを見た。

「ゴリラ舎だな」

先にご主人様が言った。

「確かここには、面白いゴリラが居ると……あれだ」

ご主人様は通路の右側を指す。そこにも大窓があり、観客がその中を覗いて賑わ

っていた。

「.....ナニアレ」

思わず目を丸めるA子が見つけたそれは、檻の中にある大きな岩山の頂上に、ピンク色の柄の毛布がちょこんと座っていた。



「ゴリラが、服着てる」

「着てるって言うか巻いてるんだ。ピーコっていうメスゴリラ。この『ゴリラの森』というゴリラ舎の一番の古株だ。布を身体に巻くのが好きで、いつもあんな風に布を手放さないんだ」

「面白い習性のゴリラがいるもんですね.....」

「ちなみに今座っている場所は重量計になってて、ほら、そこの壁に数字が表示されるようになってる」

「本当だ。面白い仕組みですね.....あ、あんな所に子供のゴリラが」

「おう、そういや子供のゴリラも居るんだよな。去年の11月に生まれたってニュースで聞いた事がある」

「最近なんですね」

「ここのゴリラは良く、各地のゴリラとお見合いしてて繁殖を試みてるらしい。繁殖センターとしての一面があるとか」

それを聞いて、A子はまた物憂げな顔をする。

「.....やっぱりゴリラも絶滅危惧種なんですかね」

「種類にもよるらしい。ここにいるのはニシローランドゴリラで、一時は絶滅を危惧されていたが、最近、野生種が12万頭も見つかったって報告があったらしいな。まあそれでも他の種はかなりヤバイらしいけど」

「人は増える一方なんですけどね」

「かといって減らす訳にはいかんしな。仮に戦争なんかやらかしたら、減るのは人だけの話じゃなくなる」

「うー」

唸るA子。ご主人様はそんなA子の頭を、軽く撫でた。

「難しく考えるなよ。俺たちは俺たちの出来る事を精一杯やっていればいいんだ」

「……ん」

「次行くか」

二人はゴリラ舎の通路を進む。突き当たりを左に回るとそこには、バードハウスと書かれた建物があった。

「こんな所にも鳥類展示館か」

「ご主人様、あれ！」

A子は、ピシッ、と空気を打つような音が聞こえてきそうな勢いで、バードハウスの横にある樹を指した。

その周りには何故か、透明なアクリルの柵が敷かれていた。

何か居るのかとご主人様は目を凝らすと、A子はその場に駆け寄った。

「あーりーくーいーっ！！」

「おいおい」



ご主人様は呆れたように肩をすくめ、その後をついていった。

「おー、確かにアrikui」

アクリルの柵の中では、白いアrikuiが樹の周りをうろうろ歩き回っていた。

「小さいなあ、子供のアrikuiかね」

「かーいいいっ！」

その場に釘付けになっていたA子はそのアrikuiにすっかりメロメロになっていた。

「樹に登った、樹に登った！」

「あはは……しかしこんな間近に観られるとは」

「手が届きそうですね！」

「やめとけ。アrikuiのあの爪を見ろ」

「あ」

A子は思わず固まる。アリクイが樹を登るのに使っていた、その小さな身体には不釣り合いなくらいな大きい爪はちょっとした凶器のようである。

「人間がアレで掴まれたら、ぶっさり」

「うー」

アリクイに向けられたA子の両手は引き気味に振られていた。そんなA子を見てご主人様は苦笑する。

「さて、バードハウス見て行くか？」

「先、行きましょう。鳥は別にいいです」

「面白そうだけど、まあ良いか」

ちなみにバードハウスは2階建てになっており、その中では、カワセミやハチドリのような、小さい珍しい鳥類が展示されている。

二人はバードハウスの脇にある、下り坂の小道を抜けて行った。その先は周囲が鳥類の檻で囲まれている大きな広場になっていて、中央に生い茂った樹で覆われた休憩コーナーと、フードコーナーそして販売所があった。

「奥の方、工事中ですね」

A子が指した先には、大きなトタンの壁があり、その裏で何か工事しているようであった。

「アレ、この奥ってペンギンやシロクマが展示されているんだけど……」

不思議がる二人はフードコーナーを抜けて、その工事現場の前に立つ。そこには工事の内容が書かれた看板があった。

「あー、このエリア、作り直ししているのか。そういやここ、シロクマ舎の裏側が西園への道だったけど急登過ぎてきつかったんだよなあ」

「完成は来年みたいですね。ここにある完成予想図を見るとだいぶ改善されるよ

うです」

「ほう、シロクマ舎のプールの中にチューブの通路設けて、シロクマを間近で見られるようにするのか」

「旭山動物園みたいな造りにするようですね。完成したら見に来たいなあ」

「フリーパス作ったんだから安心して行けるな」

「その時はまた来ましょう、ご主人様」

A子は嬉しそうに言う。

「ああ。さて、これで半分見てきたけど、そのフードコーナーで一息つくか」

「私、アイスが食べたい」

「いいな、それ……確かにまだ暑いわ」

ご主人様は溜息混じりに言う。都内は残暑はおろか初秋という言葉が使われる時期だということに、猛暑が続く異常気象に悩まされていた。今日は先日久し振りに一雨降ったおかげでようやく気温も落ち着いたのだが、それでも太陽が頭上にある頃はかなり暑かった。

「じゃあ、買ってくるか」

「待って下さい、ご主人様は席を確保して下さい。私が買ってきます」

「いや、いいから」

「でも……」

「今日は日頃お世話になってる A 子へのお礼みたいなモンだ、折角の休日だし、のんびりしておけ」



ご主人様はそう言って、売店のほうへさっさと歩いていった。

A 子は戸惑いつつ、仕方ないか、と呟いて、仕方なく空いている席を探した。

休日ではあったがこの暑さで、日陰や屋根のある席に客が集中していたせいも、屋外のテーブルには空席がいくつかあった。

A 子は売店に近い席を見つけ、そこに座って A 子を待った。

しばらくすると、A 子を見つけたご主人様が戻ってきた。その両手はソフトクリームで塞がっていた。

「好み聞くの忘れてたから、ミックスと普通のソフト買って来た。どっちがいい？」

「両方」

「却下」

「普通のでいいです」

A子は意地悪そうに笑う。ご主人様は苦笑い混じりに舌打ちし、普通のソフトクリームをA子に手渡した。

「ありがとうございます、ではいただきます」

元気よくいうと、A子は美味しそうにソフトクリームを食べ始めた。

ご主人様もミックスソフトを食べ始める。炎天下と言うほどではない日差しだが、ソフトクリームの冷たさは格段に美味しかった。

「……」

ソフトクリームを食べているA子を見ながら、ご主人様はふと、ある事を考えていた。

(なんだかんだ言ってもA子は働き者だからなあ、たまにはこんなのんびりした日も悪くないか)

その時はまた来ましょう、ご主人様。

(また、か。一人で行っても良いのにな。これじゃまるでデートだ)

ご主人様は、フッ、と笑う。

(他に誘う男でもいりゃいいんだが。働き者だし、そりゃあ、たまには限度を知らなくて暴走したりもするがそれでマメだし、ぶっちゃけこう言う女を嫁に持てば楽なんだろうけどなあ.....)

そう考えた途端、ご主人様の顔が険しくなる。

(.....いやいやいや。無理、俺は無理。こいつ貧乳だしっ！ 巨乳敵視しているしっ！ 俺は巨乳派だしっ！ 即ち、俺の敵！ 何故迷う！)

ご主人様は何とも酷い論法で葛藤していると、ふと、A子がこっちを睨んでいる事に気づいた。

「な、なんだよ」

「.....今、酷い事考えてませんでした？」

(このアマ.....心の中でも読めるのか？)

ご主人様はあまりの事に冷や汗を掻く。

「.....断っておきますが」

「ゴクリ」

「ここまで食べたのに、普通のソフトクリームが食べたかったなんて言わない下さいねっ！」

アホー。呆けるご主人様の頭上を、通りかかったカラスが絶妙なタイミングで鳴いて  
みせた。

第3巻 上野動物園 その3 完結編へ続く